



## 『ともだち賛歌』

作詞： 阪田 寛夫

原曲： アメリカ愛国歌

ひとりひとりが腕組めば  
たちまち誰でも 仲良しさ  
やあやあ みなさん こんにちは  
みんなで あくしゅ

※空には お日さま  
足もとに 地球  
みんなみんなあつまれ  
みんなでうたえ

ロビン・フッドにトム・ソーヤー  
みんなぼくの 仲間だぞ  
おひげをはやした おじさんも  
むかしはこども

※くりかえし  
(3番略)



## 傍観者効果

校長 蒲谷 猛

猛暑を越え、酷暑・炎暑と呼ばれるような暑い日々がまだ続っていますが、夏休みが明けて子どもたちが学校にもどってきました。心のスクリーンセーバーは、PCのようにパツとは切り替わらないのですけれど、今年度の「佳境」である9～12月の学校生活を拡充するぞという気持ちは徐々に高まっています。

今夏前半、私は脚の痛みに悩まされました。寝ていて起きること、座っていて立つことが容易ではなく苦しみました。今は回復しましたが、その真っ最中は、電車内で人の優しさに助けられる経験もしました。席を譲るのにも勇気が必要なのに。

「傍観者効果」という社会心理学用語を知りました。心理学では「〇〇効果」という用語がいろいろありますが、「薬の効果」というときはちがいで、人が陥りがちな傾向というような意味で使われます。この「傍観者効果」とは、助けを必要とする人と出会ったとき、周囲に多くの人がいる人とかえって援助の行動をとる人の割合は低くなる、というもの。2人、3人、6人と人数を変えて、個室から交信してグループ討議をしている最中に、メンバーの一人が発作で苦しみ出す、という心理学実験を繰り返してみたところ、要救援者と一対一の2人グループではほぼ全員が相手を助けようと行動を起

こしたのに比べて、6人グループでは38%の人は何もしようとしないことがわかったのだそうです。

自分がやらなくてもきっと誰かがやるだろう、誰もやらないんだからそれほど緊急なことではないのだろう、もしかして自分が率先して動いたら余計なお世話だったり周囲から浮いたりしてしまうかも知れないという、3種類の心の働きがこの心理現象を引き起こすと分析しています。これ、自分の身を守ろうとする防衛機能として人に備わったものでもありますから、否定するものではなく「陥りがちな傾向」として心に刻んでおく必要があるものですよね。

「困っている人がいたら、すすんで手を差し伸べよう」と子どもたちに指導しますが、この「傍観者効果」からみても、実は、これって大人でも容易ではないことであることがわかります。このことから、良いこと、大切なこととして子どもに容易ではないことを一方的に強いてしまっていないか見直してみる必要があると思いました。「協力する」「相手の気持ちになって考える」「率先して行動を起こす」どれも望ましい人の姿ですけれど、これって、わたしたち大人の姿から感化されたり、具体的な行動経験を通してその価値を実感したときに、子どもははじめて動き出せるものではないでしょうか。大人の社会からいじめがなくならないのに、子どもにいじめ撲滅を迫ったって、どうですかそれって。「チーム担任制」を支える教職員集団の真価が問われます。校長の私にとっては自慢の原小職員チームですが、「佳境」の9～12月を前に、自分たちの姿から子どもたちの心に働きかけられるようチーム力に一層磨きをかけていきたいとなんだかワクワクしています。